

公開講演会記録

満洲サマン文化と言語の危機

——失われゆく満洲民族の原郷とサマンの宇宙の時空を求めて

映画監督・音楽家・画家 金大偉



中国史上最も広大な領土を誇った最後の王朝、清。映画『ラストエンペラー』では、絢爛豪華な宮廷文化が描かれ、強いイメージを残した。この帝国を築いたのが満洲族であり、現在の人口は約1100万人。消滅の危機にある満洲語をネイティブで話せる人は、もはや数十名。信仰するシャーマニズムの伝統、サマン（薩満＝シャーマン）教の儀式や祭りも、限られたわずかな村に残るばかりとなった。

この現状について、満洲族にルーツをもつ私が、近年に制作した2本のドキュメント映画を軸に、自分のアイデ

ンティティーを求め、民族信仰や文化が消失しつつある現状に悲哀を感じながらも、存続が危ぶまれる伝統風習を守りぬこうとする人々の苦闘と希望、精神や意志の存続について記述したい。

納西族との出会い——満洲サマン映画を制作する動機

私は2002～07年の数年間、音楽の仕事で、中国の少数民族の古い民謡を収集し、それを現代の音楽手法によって再構築した曲を多く手がけていた。現在も使用されている世界最後の象形

文字であるトンパ文字で知られる中国雲南省の納西（ナシ）族を訪ねた2002年のとき、電気のない標高3000メートルの山地に住む人々の純粋に生きる姿を見て深い感動を覚えたことが、今でも鮮やかに記憶に残る。私自身は中国東北生まれの満洲族であり、南の納西族とは全く異なる文化をもつ。私の父が満洲族で、母が日本人である。そこでいろいろ考えた私は、異民族との融合、あるいは異文化を認識し受け止めることが果たしてできるのか、自分の生の体験として挑戦してみたいと思った。自分の個性を重視してきた私

だが、現地で彼らの古い歌を聴き、まさにその土地の魂と環境がもつ「生命の力」を感じた。そして、民族的な個性と自分の個性や価値観は、すべて連動しているように思い始めたのである。これは自分にとって生々しい真実であり、私の異文化認識における第一歩であったと思う。文明同士が出会い、衝突ではなく互いを認め理解し合っていく必要性を強く感じた私は、納西族の古い民歌と私自身の感性が融合した斬新的な音楽CDを作成した。そして文化交流の意味も含め、古い歴史と文化の一部を新しい表現手法で多くの人々に伝えたいと思った。第一弾は2003年に発売され、また2007年の12月にその続編である第二弾と第三弾の音楽CDが発売された。

納西族の文化の発祥地といわれる白地村で生まれ育った人が、自分たちの歌を歌うということは、これは歴史的な模倣や真似ではなく、その土地の魂とその環境がもつ「生命の力」そのものである。難解な論理や言語の飾りを越えて、歌はシンプルで、ここでは日常生活そのものが歌なのである。大自らの力は人間の生と死を支え、これらの歌もまた人々に「生きる」ための知恵として与えられていると言える。

私はこれらの歌を取材し、自分なりのやり方でこの文化を世界に伝えていきたいと考えている。これは単に現地の歌の再現ではなく、私の感性を通じた「現地のイメージそのもの」を分かちやすく表現して伝えることを目的としている。これによって異なる文化意識が地域の境界線を越えて現代と交流し、融合して新たに創造された「自由」として見出されることが可能になればと思っている。

今、我々に必要なのは文化の整理や短絡的な切り捨てではない。むしろ互いを尊重し合うことなのだ。「文化」を整理すればするほど視野は狭くなり、混乱も増え、「自由」の姿は失われていく。私たちの世界において、新しいものも、古いものもすべてが大切であり、自分と無縁なものは何一つないことを認識しなければならぬのかもしれない。

なぜ満洲サマン映画なのか？

考えてみたら、私のルーツは満洲族だった。自分のルーツを知りたいと同時に、自民族のアイデンティティーも探りたくなったのである。ついに、南部の納西族との仕事を終えて、早速、私は2007年に自分の生まれ故郷である中国東北の遼寧省撫順市に向かった。自分のルーツが満洲族である以上、一層その民族の文化や風習に興味を強くいだくのである。まして子どもの頃に来日して、主な教育は日本で受けたことで、むしろ自民族の文化について、あまり深く知らなかったとも言える。

このような考えに至ったのは、やはり2002年頃から自分の表現活動において、一つの新たな考えが生まれたからだ。それがすべての始まりでもあった。その考えとは、ものを創ることと表現することをいかに自分自身にとっての真実性に近づけることになるかということである。同じ場所や地域にずっと留まって、創作活動をするとい

うことは、いかに無味乾燥で、リアリティーが欠けているかを強く感じた。そうすると、やはり自分が知らない場所で様々な状況を体験しながら、作品を作ることの大切さを一層感じてしまうのだ。これは私なりのフィールドワークである。現地の体験を生かして、自分の中で調和と統合をはかり、最終的に自分の個性と異民族や異文化の要素との融合を可能にしたと考えられる。加えて他者との出会いによって自己存在が再認識できるのがとても大事なことであると思う。

2007年に満洲地域を旅した主な理由は、いよいよ自民族のアイデンティティーや伝統文化の原点を探ってみたに思いながら、満洲語で歌う人々の古い民歌やシャーマンの神歌を探して、自分の民族の歌を独自の手法で作りたいと思ったからである。しかし、残念なこと、現地に行つて分かったことは、約1100万人の満洲族は、満洲語がほとんど話せないのが現状だった。約1か月間の旅は、ほぼ収穫なしのままであった。本当に驚いた。現地には、

まともに満洲の言語や風習をまとめた映像作品すら見つからなかった。満洲語を使用した歌のCDもなかった。幸い現地の学者や研究者から数冊の本をいただくことができ、持ち帰ったのである。このような状況の中、私は非常に悲しみを感じた。

私が東北の満洲族自治區などを訪ねたとき、サマン神歌を歌う人も、民歌を歌う人もほとんどいないように見えた。これは一つの民族の存在末期なのだろうか？ 自らの風習や宗教信仰もなくなり、言語も消えるとしたら、この民族における根本的な精神部分が失われてゆくのではないか。

満洲族とは何か

そもそも満洲族と清帝国は、どんな関係性をもつのかについて考えてみよう。満洲族の前身が女真族で、1616年に、一代目の皇帝（ハーン）である愛新覚羅・ヌルハチによって後金国が建国される。ちなみに私の家系も同じ一族である。その都はヘトウアラで、

現在の中国東北の遼寧省撫順市の郊外のあたりにある。そして、二代目の皇帝であるホンタイジが1636年に国号を後金国から「清」（「大清国」）と改め、女真族を満洲族に変えて、以降満洲は民族名となる。三代目の皇帝の時代、明朝が滅ばされ、北京に入り、中国全土の支配に成功し、大清帝国として268年間、中国領土の最大版図を誇り、少数民族の支配による多民族国家が成立したのである。近代では、有名なアヘン戦争や日清戦争を経て、1911年の辛亥革命の翌年に滅亡する。その後は、皆さんがご存知のように、1932年に満洲帝国が建国される。

この長い流れの中、漢民族との融合、その他の民族との共存、文化の融合などが進み、そして、第2次世界大戦後の一連の社会変動、文化大革命などを経て、ついに自民族の純粋かつネイティブな民族文化と言語が失われ、滅亡寸前になったと言えよう。偶然にも、私がこのタイミンで出会わざるを得なかったのだろうか？ あるいは必然であろうか？ ともかく、自分のルー

ツである民族のエネルギーによって、強いパワーに動かされて、背中を押されたのだ。満洲サマンの力であったかもしれない。

満洲族の信仰

満洲民族は森の民と言われ、狩

猟民族である。大自然と共生する中から生まれた信仰がシャーマニズムであり、万物の中に神霊が存在するという教えである。英語読みではシャーマンと呼び、北方ツングース系諸民族の呪術・宗教的な職能者を指す。「シャーマン」は原語に近い読みでは、サマン（薩満）と呼ぶのが相応しい。本稿ではサマンと記す。サマンとは、神霊の使者で、人間と神と霊の間をつなぐ者である。彼らは、自らの魂を脱魂する

エクスタシーの技術ができると同時に、憑依する、いわゆるポゼッションの状態になるように、精霊などが付随してくる状態を換出する力をもつのである。満洲族のサマンは、上記のような力のみを重視したのではなく、むしろ一族



満洲サマン姿の関長継氏（2016年）

の族長がサマンになるケースが多い。文化知識の伝授や村民全体を健全に保ち、村民を幸せにするための保護者となり、知恵をもつ長老となってゆくのである。

シャーマニズムは文明を解明する一つの鍵であるように、現代社会において良き知恵として存続するのであろう。

満洲サマン文化の映画を撮り始めた

私は考え重ねて、音楽の制作と同時に映画を作らなければならぬと思わせるような力に突き動かされたかのように、ドキュメント

映画を撮りたいと強く思い始めた。そして、2008～09年にかけて、現地を訪ね、当地の友人や協力者たちに助けられながら、時間がどんどん進んでゆく中で、ついに本物のサマンや満洲族の伝統行事と儀式に出会った。しかし、遅かったと思う。

2008年には、本当にわずかな長



満洲サマン儀式の映画撮影風景、左端は撮影中の筆者（2011年）

老サマンしか残っていなかった。しかも、2009年に会った関玉林氏（老サマン）は、私の撮影を終えて、翌年に他界したのである。氏との出会いによって、よりサマン文化の探究が深まっていたというのに。

2011年、同じ村で伝統祭りの撮影を敢行した。このときは、次世代のサマンが神歌を歌いながら、サマン儀式を行っていた。しかし、故・関玉林老サマンの遺志を元に村民たちが祭を実行したにもかかわらず、何かもの足りないような感じをいだいた。多分、これは伝統儀式が消失する前における最後の姿であるように見えてしまうのだ。良くも悪くも、このレベルでしか残存できないかもしれない。言語、宗教などが失われてゆく民族の悲しみは、現在に始まったのではなく、むしろ数十年前からもうスタートしていたのである。

約8年をかけて映画『ロストマン チュリア サマン』（2016年）は完成した。文化伝承の問題は、満洲族の



老サマン関玉林氏と共に（2009年）

みの問題ではないと思う。世界においても、失われゆく民族文化は多くあるように考えられる。私は常に映像のあり方を探っていきたいと考えている。自分のまわり、また民族同志、および異民族の文化などを含めて、少しでも多くの映像作品に収めたいと願っている。同時にこの表現の形は、国境を越えて皆さんとの共有のあり方も大事であると思う。ゆえに世界の民族それぞれがもつ個性を尊重し合い、大事にしながら、その普遍性も喚起しなければ、共存や共生する深い意味が失われるのであろう。その土地と共鳴する作業は、新しい映像表現への様式に連結するのである。そこで民族、国境、人種など

を超えた調和および統合意識が、光のように永遠に輝き続けるのであろう。

第二弾の映画『天空のサマン』の制作

このように映画の制作がさらに続いたのである。第一弾映画が完成する前年の2015年に、撮影が足りない部分はまだ残っていた。さらに満洲サマン文化における新たなキーポイントに気が付いたのである。ほどなくして第二弾の映画制作を考案してみた。

第一作は、満洲サマン文化や言語の消滅について、分かりやすく焦点を絞り、失われゆく民族伝統文化の悲しみを主旨として描いた作品であった。この状態を世界に発信したのである。現在の厳しい状況を見ると、今から続けて記録していかなければならない、信仰であるサマン文化や満洲言語が消えるに違いない。とにかく消滅してしまう前に満洲の広大な地域に点在する満洲民俗文化、すなわち、満洲語を話すネイティブの年配の方、満洲文化の研

究者、博物館、サマン儀式を行う幾つかの村を全部撮影・記録をすることである。残り少ない文化の遺跡を探すために、数年間をかけて様々な場所を取材したのだ。

辺鄙なところも多く、身の安全も考慮しつつ、それでも探求と撮影を続けたのである。良くも悪くも残留するわずかな満洲伝統文化をできる限り収録していきたいと思った。私が思うに、民俗の信仰と言語を求めていくということは、自民族の魂や精神性を求めることであり、民族の根源やアイデンティティーを追求することでもあるのだ。この残り少ない文化のエッセンスを集約して、そのすべての要素を第二弾の映画に収録したいと強く思い描いた。そして2023年にできたのが『天空のサマン』という映画だった。

9年間かけて完成した作品である。消滅する寸前の満洲族の伝統文化、土着文化の記録である。今はもう取材できない状況となっている。取材したい対象がかなり消滅してしまったのである。この映画が完成後に、映画の中に

登場した老年の皆さんは、残念なことに数人が亡くなった。文化の消滅は、本当に早い、様々な文化の融合により、小さな文化の方が早く失われるのである。

限られた取材は、目的達成までかなりの時間が必要であった。簡単にたどりつくことはなかった。相応しくない場所、人物が多く、見せ掛けの部分も多かったと言える。本物を映像に収めたい、貴重な人物の語りや証言を撮影したいのである。その思いで映画撮影を続けた。毎年の現地での取材期間はおおよそ1か月から2か月くらいで、取材だけで6年を費やした。細かい検証や調査に時間を要するので、むしろこれが大事なことだったのであろう。

満洲語を話す最後の村

2017年の夏、黒龍江省富裕県にある三家子村（屯）を訪問した。かなり辺鄙なところで、交通手段も不便である。ここは、中国東北地域では、満洲語で会話ができる唯一の村である。

このときは、ネイティブで話せる老人たちは、約15名であった。村の子どもたちを教える満洲語学校もあり、若い世代にも満洲語を広げようといういろいろ努力を重ねてきた村でもある。現在1000万人を超える満洲族は、自民族の言語がもはや失われていることについて、むしろ意識できていないのである。もちろん、現在では満洲語を学ぶ各地の学者や少数派の人々は増えているが、これは歴史などの研究のためであり、生活の中における実用性はほとんどないと言えよう。

もしかすると、あと数年後は、満洲語を話す年配のおじいさんやおばあさんたちがいなくなると、土着のアイティブな満洲語がなくなる可能性が大きいに違いない。もちろん、この村の満洲語も一つの方言で、標準の満洲語ではない。と言っても、標準の満洲語はもうないに近い。言い換えれば、原点となる標本的な満洲語の発音はどこにもないと考えられる。かなり厳しい状況と言える。

満洲語はツングース語族に属する言

語で、清王朝の支配民族にあたる満洲族の母語である。満洲族の前身である女真族が使用した言語は、満洲語の近縁である。満洲文字はモンゴル文字を改良した姿であるという。約400年前に、満洲族が建国するとき、人口の上では圧倒的な少数派でありながら支配者として漢民族を含む中国全体に君臨したのである。結果的には、満洲族の文化は中国文化と融合・同化していった。そして清朝が滅び、漢民族が主体の時代に入ると、その同化速度は加速していくこととなり、ついには現在に至り、満洲語の消滅は時間の問題であろう。

それでもやはり何らかの形で傳承していきたいと強く思う。私は映像で、その言語の記録を少しでも残していきたいと考えている。

言語も信仰も、固有民族の魂であり、精神である。失われてはいけないと思う。

やはりとても悲しい気持ちになる。過去の時代が過ぎて、歴史の変動や様々な変革を経て、今はグローバル化が究

極的に進み、民族同士が融合され、そこで自民族のアイデンティティーが薄れて、民族ごとが大きな世界に飲み込まれてゆくのである。

ここでこそ、再び自分の存在を意識しなければいけないのであろう。自己存在における重要なポイントは、まず自民族の伝統文化や信仰、そして自身および民族的なアイデンティティーを意識することだと思う。

3日間の満洲族のサマン儀式 撮影

黒龍江省の冬は零下20度でとても寒い。2017年11月、私は再び黒龍江省寧安市依藍岡村に向かった。零下20度でとても寒い場所であった。

そこで、関氏一族が5年に1度に大きなサマン儀式を行うのである。これは収穫へのお祝いと祈りであり、天神や祖先神への祈りでもある。なかなか出会えない祭りだという。

今回は、3日間にわたり、関氏一族の大儀式を見ることができた。

私が関氏一族と出会ったのは、2009年で、前回の映画を制作したとき以来、今回は招待を受けて、儀式に参加し、撮影することができた。関氏は満洲の姓で瓜勒佳氏 (guwalgiya) となる。この名前は金代の女真族に由来する。

満洲族のサマン儀式は、「野祭」と「家祭」に分かれる。「野祭」とは、動物と植物の神霊などを祀る原初の儀礼であり、「家祭」とは、氏族の先祖の神霊を祀る基本の儀礼である。この家祭は漢民族の「祖先祭祀」と密接に関連しているため、今でもわずかに残存している。「野祭」は社会との関係もあり、非常に少なくなったと考えられる。

満洲族の家祭の流れは、とても複雑で、形式や儀礼など綿密に規定されている。例えば、餗餗神祭、背灯祭、天祭、換索祭など11種類あると言われ、様々な形で先祖の神々、また保護神、原始神や天神などに祈りを捧げるのである。

撮影現場はかなり緊迫した空気に包



満洲サマンのお祭り、先祖への祈りの儀式。若いサマンが鼓を叩く（2017年）



儀式の撮影後に関氏一族と記念撮影。右から2番目は大サマンの関雲泰氏（2017年）

まれていた。神事において、本来は撮影禁止であり、先祖や神様に失礼にあたることは、どこの国も同じであろう。だが、この撮影記録は、満洲族の現在の立場から考えれば、もう既に失われつつある文化遺産の救出作業に相当する行為であると私は確信していた。今

現在を撮らなければ、おそらく2度とできないであろう。今回は5年に1度の大儀式で、もうこれで最後なのかと思われるような、満洲サマン儀式の流れを隠さずに公開しよう、という意向があるのだ。私は、その場で起こっていることや遭遇したことを、その瞬間、

素早く撮らなければならない。チャンスは1度しかないケースが多く、私は手持ちのメインカメラ1台と、すぐにポケットから出せる小型カメラの2台で、同時に撮れるような体勢で構え、3日間、同行した日本人カメラマンと二人で、様々な撮影を続けた。撮り直

しができる儀式などはほぼなかった。とても大変な作業であったが、自分が求めた自民族のパワーや光に出会ったような喜びをも味わうことができた。

サマン太鼓の響き、リズムカルな動きが、神聖な時間の脈打つサイクルを表現する。サマンの踊りは、かつてあった神々の力との連結を蘇らせ、神々や精霊たちの力を超自然的な方法で、再び地上にもたらす動きのようであった。これはまさに

狩猟、騎馬民族のエネルギーとしか考えられないのだ。

世の中は不安定な状態になればなるほど、神霊への祈りの願望が高まるのであろう。明日の平安、来年の安泰、未来の幸福などを、すべての人間が常に願っている。ここでサマンの存在が必要であり、天神への祈りと儀式が必要なのである。

文化映画としての完成

こうして、3日間の撮影を行った。極めて貴重な映像に違いない、これらの映像素材によって、失われゆく満洲民族の風習を伝承するために、何らかの意味を果たすことができると思う。さらに東北各地を旅しながら取材を続けた。2018年の2月、真冬のマイナス28度の中で、満洲族の聖地である「長白山」のエリアを撮影した。ドローンによる空撮だった。顔と手を出すと、痺れるような状態にもかかわらず、厳しい冬の寒さを忘れ、歴史に輝いた満洲族の聖地や精神文化を少し

でも映像に残したい気持ちが強かった。社会制度の違い、民族の習慣の違い、人間関係の接し方の違いなどが多い中、ようやく2本の映画を完成させたことによって、自分自身のフィールドワークが一層前進したと感じた。より強く、満洲族の皆さんと絆が結ばれたと実感した。これは相互理解や共同認識の「輪」を作ることでもあるのだ。

2008年から23年までの間に、映

画『ロストマンチュリア サマン』と『天空のサマン』を完成するにあたって、数多くの協力者や友人の支持があった。また関心をもって協賛していただいた各社および団体の皆様に、心より深く感謝したい。

今日、私たちは時代の厳しい岐路に立たされている。この2本の映画はそれぞれの固有の伝統文化を後世に残すため、伝承するすべての者たちへの警



第二作映画『天空のサマン』のチラシ（2023年公開）

* 本稿の写真はすべて筆者提供

鐘とも言えるかもしれない。これは、むしろ満洲族のみの問題ではなく、失われゆく民族の精神や風習においては、日本や世界も同じ状況に見えるところが多いのである。

私が考える「文化映像学」では、いかに表現者の個性を大事にするか、また表現される他者の考え方や個性を尊重し合うか、その融合から生まれる統合された共有意識こそが大きな基盤であると考えている。そして、制作者が現地の実体験を通じて一つ一つの地域に生活する民族の精神、考え方、宗教、歴史などをまとめて作品に仕上げることの作業過程を重視するものである。

文化の共存、人種と国境を超えて

私たちが住む地域の一つの「惑星」としてとらえたとき、実は世界は東西を問わずに、あらゆるものが共通し、共鳴していると感じられる。特に殺伐としてカオスになった現在社会では、一つ一つの民族の個性、風習、信仰な

どを認識し、理解することは、とても重要なことである。自分が大事であると同時に他者も大事であり、互いに尊重し合うことがキーポイントである。より大切なのは、地球全体を視野に入れた民族文化の発展を推進することが非常に重要であろう。

映像は世界を映す鏡としての機能を果たすのである。「原点に戻る」「自己探求」「民族のアイデンティティー探し」「野生性の再認識」などの考え方が一方的に増えていくことは、むしろ自然な流れである。そこにある民族固有の情景は、時代の変化に対する複雑かつ重要な感情を生み出す原点の姿であると言えよう。その中に、過去、現在、未来に通じ合う自然の「原点の力」や「生命のエネルギー」が存在するのである。サマン文化、すなわちシヤーマニズムの力がこの中に見えてくる。私たちは、閉鎖的および主観的な意識を乗り越えて、古き知恵を再認識、再利用、再進化させるべき義務を果たさなければならないと思う。

自然曼荼羅から発する無限なる光、

あるいは自然の奥深くに秘められている様々な意識、そこで展開される未知なる融合が存在するのだ。クリエイションの世界を通して、民族、国境、人種などを超えた真なる調和の光を求めていきたいと思う。

(2024年10月3日・公開講演会)

筆者略歴 (Kin Tai)

中国遼寧省生まれ。父は満洲族の中国人、母は日本人。来日後、独自の技法と多彩なイメージーションによって音楽・映像・美術などの世界を統合的に表現。近年はアジアをテーマに音楽や映像作品を創作するほか、映像空間インスタレーション展示、絵画展、ファッションショーおよび映画音楽の制作、演劇舞台の演出、音楽コンサートやイベントを行い、様々な要素を融合した斬新な空間や作品を創出している。